

ある時米銭を請ふものであると書いてある。後世には石川郡藤江村に二戸の舞々があつて、共に三太夫といひ、佳節には城下に入り來つて施興を受けた。又羽咋郡上田村に舞々の居たことは、前田利常が承應二年三月十二日の印書に宛所舞々三郎太夫で、於能州羽咋郡押水庄上田村居屋敷三百五十歩之處、任天正年中先判之旨宛行畢。諸役等無相違令免許者也。仍如件。』とあるによつて知られるが、これはまだ幸若を請ふものであつたかも知れぬ。

マブチカフ 馬淵家譜 一册、寶永五年馬淵高定の撰。室鳩巢が序文を加へて居る。

マブチコダユウ 馬淵小太夫 元祿十年御居間坊主となり、御歩並から新番並に至り、享保八年新知百三十石を得て組外に列し、九年五十石を加増せられ、十二年六月三日歿した。子孫相繼いで藩に仕へる。

マブチシゲユキ 馬淵重行 通稱乙次郎。父は源左衛門直道。家傳の三池流算法を受けたが、時恰も和算衰頽の時に屬し、明治廿四年五月三十日五十七歳を以て歿した。

マブチタカサダ 馬淵高定 通稱友之助。加右衛門高倫の子。寛文十一年十二月初出綱紀の奥小將となり、延寶七年馬廻組、天和二年大小將組に班し、寶永二年より享保三年二月まで宮腰町奉行となり。七年五月廿六日十六歳で歿した。高定弓馬の故實に精通し、古書中武人必讀の事蹟、並びに藩の史實を採録して、武家混目集一百六十巻を撰した。其の他能越城主記一卷・笈搜記三巻・畿内遊覽馬淵私傳等の著がある。

マブチタカサダ 馬淵高定 通稱春水 治太

夫、治内。御居間坊主より御歩に昇り、元文五年新番となり、寶曆十一年新知百石を受けて組外に班し、明和元年歿した。子孫藩に世襲する。

マブチタカマサ 馬淵高政 通稱加右衛門。初め堀秀政に従ひ、次いで前田利常に仕へて五百石を領し、大坂再役には首二つを獲た。子孫八代敷馬定則五百石を受けたが、文政十一年七月八日出奔して断絶した。

マブチタカユキ 馬淵高行 通稱順左衛門。初め御算用者であつたが、明和元年父高貞の後を襲いで百石を領し、組外に列し、祐仙院附御用人・年寄中席御用を經、二年五十石を加へ、十二年御算所奉行となり、文化十四年歿した。

マブチタツミチ 馬淵立道 通稱源左衛門。父は文郎。明倫堂の算學師範となり、慶應二年正月十日歿した。

マブチナカノブ 馬淵仲暢 通稱彌太郎。七郎左衛門。高定の子であるが、早世して家を襲がなかつた。仲暢、父の著武家混目集から天文六年以降貞享元年に至る加賀藩に關することのみを抜摘して、混目集五巻をなした。一に加陽御年譜ともいふ。

マブチノブユキ 馬淵信行 通稱辰五郎。半左衛門。任藏。次郎左衛門。判大夫。知右衛門。寛延三年父半太夫義廉の遺知百八十石を襲ぎ、御馬廻に班し、明和四年表小將となり、天明五年五十石を増し、六年表小將横目に轉じ、寛政元年歿した。

マブチフミイ 馬淵文郎 通稱皋吉。源之丞。柳郷と號した。加賀藩の歩士で、御算用場に仕出し、祿四十俵を受けた。文郎三池流

の算法を村松秀允に學び、寛政十年師の後を受けて明倫堂の算學師範に列し、享和二年數學衰頽、四年勾股弦無奇術解を著した。天保元年七月十一日歿。

マヘガハ 前川 鹿島郡能登部下と金丸領との入會杉谷から流出し、金丸領で呂知海に注ぐ。流程二軒六許。

マヘガハ 前川 鹿島郡黒氏領入幡並びに野下しから流出し、一宵領のうち深澤で濁川に落合ふ。流程二軒許。

マヘガハ 前川 鹿島郡末坂領から流出し、町屋領で二宮川に落合ふ。流程五軒許。

マヘガハ 前川千祐 前田利家に仕へて百八十石を領した。その子小兵衛は狩野氏を習し、前田利政に仕へて八十石を領し、小兵衛の子典三兵衛は廣瀬氏を稱して利常に仕へた。子孫相繼いで藩に仕へる。

マヘダウチ 前田氏(加賀藩主) (一) 氏姓。前田氏は菅原氏より出たとせられる。しかし最初から必ずしも定姓がなく、天正十四年利家が父の影像を紫野大徳寺塔頭興臨院に納めた時、その讀に『能州太守平氏前田筑前刺史。先祖之法名曰『休歇道機庵主。』といひ、十六年四月聚樂行幸の時の誓詞及び詠歌には、利家・利長共に豐臣朝臣と記し、慶長二年白山比咩神社の神額にも亦加賀大納言豐臣朝臣利家卿と載せてある。然るに慶長十年徳川秀忠の利常に松平氏を習がしめた時、又源氏をも賜はつた如く、元和・寛永中には常に源朝臣利光又は利常と書いてゐて、菅原氏を冠したものは一も之を見ぬ。しかし前田氏が道眞の苗裔であるとの傳説も夙く利家の時からあつたことで、利家夜話には侯自身履之を

語つたと見え、利家着用の鎧には胸に天滿宮の三字を現して居るのみならず、元和四年七月利常が、永祿三年九月廿五日梶井宮の奥書ある傳管公筆法華經を北野神社に奉納したことも、亦同一の信仰によるものと思はれる。されば寛永十八年將軍家光が、諸家系圖傳を編輯するに當り、その資料を諸侯に徴するに及び、家光は前田光高が家康の曾孫に當るを以て、前田氏を源氏たらしめる爲に、天海を介して懇應したるに拘らず、林羅山に囑して菅原氏を出自とする系圖を作らしめ、十二月幕府に提出した。この系圖は漢文なる國文なるとあるが、畢竟同一のものでその初に、前田

中納言利常始賜松平氏、家紋梅輪内、秀吉公之時賜菊與桐。

菅承相之後胤也。菅承相在筑紫一生三子。兄曰前田、弟曰原田。其後前田氏來于尾州一爲住人。

慶長七年十月晦日夜亥時、雷震加州金澤天主閣一時、所藏之家譜寶器等悉燒失。

とのみあつて、その次は利昌(利春)・利家と次第してゐるに過ぎぬ。前田綱紀の時天和中木下貞幹をして撰ばしめた前田氏世譜も、亦道眞を始祖として居るが、高祖を利家として、その間の連絡に就いては何等記述せぬ。故に前田氏が菅原氏を出自とする信仰と、實際その血統を傳へたか否かととは全然別問題で、羅山が道眞の二子の兄を前田、弟を原田といふと書いたことは、勿論虚妄である。美濃諸舊記には、前田氏を齋藤氏の庶流とし、その名字は前田村に住したから起つたとしてゐる。然れば尾張荒子に移つた後、その地が神風抄